

## 史料紹介

### 『ソロモンの哲学の書』 (*Liber de philosophia Salomonis*)

阿部 晃平

#### 一 せいめい

本稿で紹介する『ソロモンの哲学の書』 (*Liber de philosophia Salomonis*, 以下『ソロモンの哲学』) は、九世紀に編まれた作者不明の論考である。ここにおいて論じられているのは、学問の区分方法および個々の学問の性格である。このテクストの書かれた九世紀という時代は、周知の通り、シャルルマーニュによるキリスト教的文教政策のもと、膨大な写本が筆写された期間として知られている。「カロリング・ルネサンス」とも呼ばれるこの文芸復興の時代において、学問教育も復活の兆しが見え始めていたが、他方で、その目的はキリスト教帝国樹立の目的に資する宗教的教育であり、古代の「世俗的」学問観とキリスト教の

調和が志向されていたことは既に論を俟たない。『ソロモンの哲学』では、西洋社会が継承してきた古代ギリシア以来の学問論と、キリスト教黎明期に編まれた宗教的な学問論が、教父たちからの引用を主としつつも、一部改変を伴いながら独自の形態をもって語られており、「カロリング・ルネサンス」期に知られていた学問に対する様々な見方の綜合を提示している史料と解される。

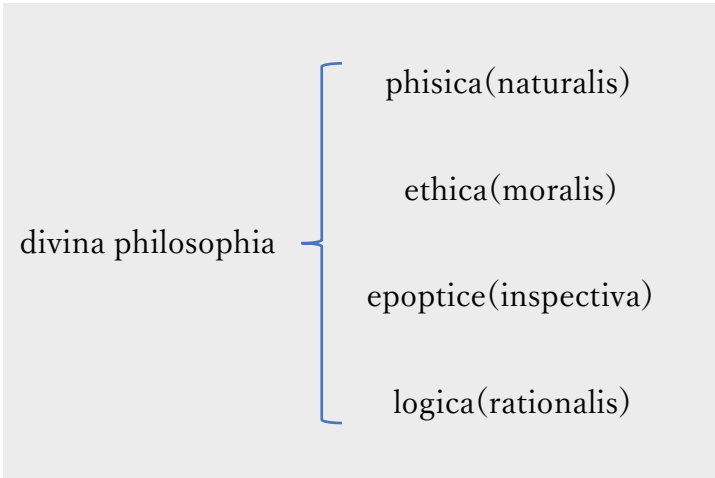
『ソロモンの哲学』において中心的なテーマとなっている学問の区分方法、すなわち学問区分論 (*divisio philosophiae*) とは、古代ギリシア時代にプラトンとアリストテレスによってその雛形が確立された、のちの大学における学芸学部分類に通ずる概念である<sup>1)</sup>。どの時代地域においてもそうだが、学問の興隆するところでは

## 『ソロモンの哲学の書』（阿部）

まずもって個々の学問のあいだの領域策定が問題となる。古代ローマはプラトンとアリストテレスに帰される理論をラテン語化して取り込み、帝国が衰亡した後も、それはボエティウス (Anicius Manlius Severinus Boethius, c. 477-524) の『ポルフェリウス註解』 (Isagen Porphyrii commentorum) やカッシオドルス (Flavius Cassiodorus, c. 485-c. 575) の『聖俗学問綱要』 (Institutiones divinarum et saecularium litterarum) 、イシドルス (Isidorus Hispalensis, c. 560-636) の『語源考』 (Etymologiae) などの仲介を経て中世へと継承された。一方、ローマがギリシアの思想を吸収しているあいだ、アレクサンドリアのユダヤ人神父たちは、ギリシアの学問区分論を基礎に据えつつも、聖書の内容理解と信仰の実践、あるいは世俗的知識に対する宗教的知恵の優越の主張という文脈において、そのうえに独自の理論を築き上げていた。『ソロモンの哲学』においてはこれら聖俗両方の理論が並列して語られており、とくにオリゲネス (Origenes, c. 184-c. 253) とカッシアヌス (Johannes Cassianus, c. 360-c. 435) からの引用がその大部分を占めている。以下では『ソロモンの哲学』に現れている三種の学問区分論について、順に概観したい。

## 二 『ソロモンの哲学』に現れる学問区分論

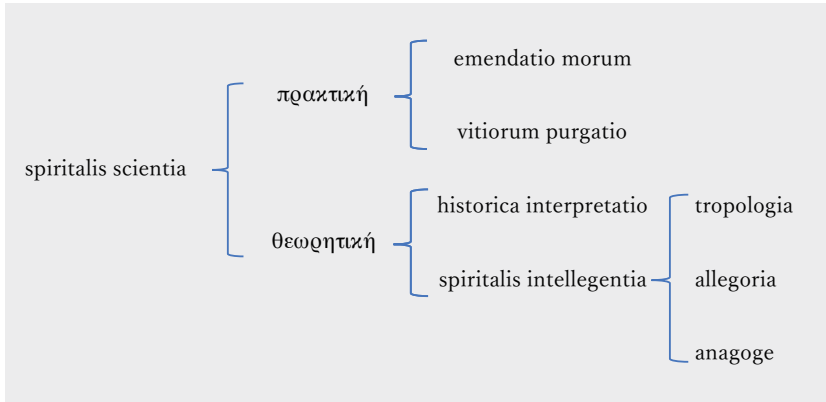
まず、第一に挙げられている区分法はオリゲネスによるものである【図1】。古代教会のもっとも高名な聖書註釈者とも言われるオリゲネスは数多の註解書や解説書を後世に遺しているが、そのなかでもとりわけ彼の学問観について詳しい著作が、『雅歌註解』 (Commentarium in Cantico canticorum) の序文である<sup>③</sup>。オリゲネスの理論はプラトン主義的な区分法、すなわち哲学を自然学 (希: φυσική/physical/physical) 羅: naturalis)、倫理学 (希: ηθική/ethica/羅: moralis)、論理学 (希: λογική/logica/羅: rationalis) の三つに大別する方法に立脚しつつ<sup>④</sup>、彼が言うところの「神的な哲学」 (divina philosophia) を、自然学、倫理学、そして観想学 (希: θεωρητική/theoretic/羅: inspectiva) <sup>⑤</sup>に分け、その代わりに論理学 (ないしは理性と言語に関わる学問と言った方が正確かもしれない) を第四の学問として位置づけている。さらに、彼は前者三つの学問知識がソロモンの著したとされる「箴言」【伝道の書「雅歌」の三編にそれぞれ見出されうることを指摘し、かつ論理学は聖書のあらゆる部分に織り込まれていると述べる。世俗的な三分法を採用しながらも、そこにキリストの神に関する学問を措定したオリゲネスの学問観はアレクサンドリア学派を代表するものであり、多少の改変を被りつ



【図1】オリゲネス的区分法（筆者作成）

つゝ、ヒエロニムス (Hieronymus, c. 347-420)、『アンブロシウス (Ambrosius, c. 340-397)』、大グレゴリウス (Gregorius Magnus, c. 540-604) らが後世に伝えた。<sup>⑧</sup>

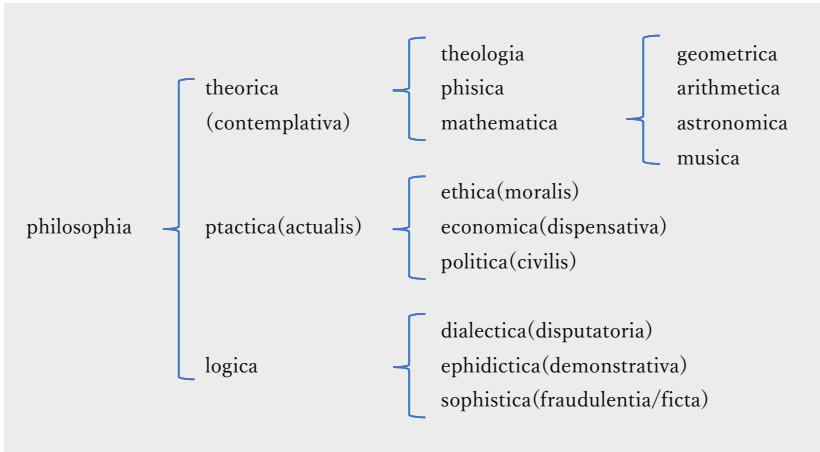
二つ目の区分論はカッシアヌスによるものである【図2】。彼は青年時代にエジプトで修道生活を送った後、その砂漠での経験を西方世界に伝えた教父として知られるが、主著のひとつである『談話集』(Conlationes)の第一四巻「靈的知識について」(De spiritali scientia)において、靈的ないしは宗教的知識の在り方について論じている。<sup>⑨</sup>オリゲネスがソロモンの著作と関連付けて世俗的知識と宗教的知恵の調和を説いたのに対し、カッシアヌスはとりわけ自身の経験に基づいた修道生活における精神的純化の実践、およびアレクサンドリア学派の流れを汲む聖書解釈の理論を、アリストテレス主義的な区分法、すなわち哲学を実践的哲学 (希: πρακτικη/practica、羅: actualis, activa) と理論的哲学 (希: θεωρητικη/theoretical/theoreticalis, 羅: inspectiva, contemplativa, speculativa) の二部門に大別する方法に当てはめ、両者を真の知識 (vera scientia) と至る靈的知識 (spiritalis scientia) として位置づけている。彼によれば、実践的哲学は多くの部門 (professio) と研究 (studia) に分けられる。その下位区分の代表としては「習慣の矯正」(emendatio morum) と「悪徳の浄



【図2】カッシアヌスの区分法(筆者作成)

化」(vitiurum purgatio)の二つが挙げられており、これらの完遂にはあらゆる悪徳の本性とそれを克服する方法を知り、すべての徳の順序を識別し、自身の心を統御する必要があることが説かれている。その一方で、カッシアヌスは理論的哲学を歴史的解释(historica interpretatio)と霊的理解(spiritalis intellegentia)の二つに分け、後者にはさらに比喩(tropologia)、「寓意(allegoria)」、神秘(anagoge)を下屬させている。しばしば聖書の四規則(quattor regula sacra Scriptura)や四解釈(quattor interpretatio)などと呼ばれるこの理論は、聖書が暗示する啓示を汲み取るための型として、アレクサンドリアのユダヤ人学者らが構築したものである。のちにダキアのアウグスティヌス(Augustinus Dacus, -1285)が、「文字」「歴史」は起こったことを、「寓意は信ずべきことを」「道徳」「比喩」は為すべきことを、神秘は目指すべきことを教える」と要約したように、これは後世における標準的な聖書の読解方法となった。このような聖書解釈の技法を学問の分類に加えようとする試みはギリシア教父らに端を発するものであるが、カッシアヌスにおいてひとつの体系化を見た。

そして、先の二例とは異なり、第三の学問区分論は純粹に世俗的なものである【図3】。オリゲネスとカッシアヌスは、それぞれプラトン主義的およびアリストテレス主義的



【図3】『ソロモンの哲学』の学問区分論（筆者作成）

な区分法と宗教的知恵との調和を志していた一方で、この第三の理論は、ある意味プラトンとアリストテレスの区分法それ自体を総合したような理論として解釈される。この第三の区分論において、哲学は実践的哲学と理論的哲学（「観想的哲学」、さらに論理学へと三分割される。実践的哲学には倫理学、家政学（希：οικονομική/[o]ce[h]lonomic[a]、羅：dispensativa）、政治学（希：πολιτική/politica、羅：civilis）が、理論的哲学には自然学、数学（希：μαθηματική/mathematica、羅：doctrinalis）、神学（希：θεολογική/theologic[a]、羅：divina）が下属し、さらに数学は幾何学（希：γεωμετρική/geometric[a]）、算術（希：ἀριθμητική/arithmetic[a]）、天文学（希：ἀστρονομική/astronomic[a]）、音楽（希：μουσική/musica）に区分される。そして、論理学には弁証法（希：πρωτοική/dialectica、羅：disputatoria）、演示法（希：ἐπιδεικτική/epidictica、羅：demonstrativa）、詭弁法（希：σοφιστική/sophistica、羅：fraudentia, ficta）が下属する。区分の根幹はアリストテレス主義的な二分法に近いが、しかし本来、論理学は彼の二分法には組み込まれていない。論理学の位置づけを巡っては古代ギリシア以来続く議論があり、基本的にプラトンの思想を継ぐ者たちはそれを一つの独立した学問とみなしたが、一方でアリストテレスの継承者たちは他の学問

### 『ソロモンの哲学の書』（阿部）

を下支えする文字通りの意味での道具（オルガノン）と捉えていたために、学問の体系には組み込まなかった。<sup>18</sup>この第三の学問区分論は論理学に対する二つの相反する主張を綜合する一つの手法であったと考えられ、初期中世における学問区分論の新たな展開を示唆していると言える。<sup>19</sup>

### 三 『ソロモンの哲学』の写本

『ソロモンの哲学』の完全な写本は、現在ミュンヘン州立図書館に所蔵されている六四〇七番写本（以下M写本）が最古のものである。<sup>20</sup>B・ビショッフによれば、この写本は八〇〇年前後にヴェローナにおいて助祭パシフィクス監督のもと作成された後、それほど時間を待たずフライジングに移送された。<sup>21</sup>全一二〇葉からなるM写本には、アルクインの『修辞学と徳についての対話』（*Dialogus de rhetorica et virtutibus*）や『弁証論』（*De dialectica*）、アウグスティヌスの『キリスト教の教え』（*De doctrina Christiana*）と『真の宗教について』（*De vera religione*）からの抜粋、偽アウグスティヌスの『三位一体論』（*De unitate sanctae trinitatis dialogus*）など、九世紀の主要な学問的テキストがともに綴じられていることから、修道士の教育のための教科書として用いられていたものと考え

られている。<sup>22</sup>

一二世紀にカンタベリーの聖アウグスティン修道院で筆写された大英図書館蔵の写本（以下L写本）も、M写本とほぼ同様のオリゲネスとカッシアヌスの引用テキストから成り立っているが、章構成が大きく異なり、M写本には見られない装飾的な体裁をとっている。<sup>23</sup>L写本についてはG・ダハンが研究・翻刻しているが、彼は九世紀のM写本の存在を認知しておらず、一二世紀の文脈でこのテキストを議論していることには留意すべきである。<sup>24</sup>その他にも、より簡素化されているものの、同一の引用箇所をもつ写本が、九世紀から一二世紀にかけて多数確認される。これらの諸写本はビショッフやM・グラープマンらが部分的に校訂し、岩熊幸男氏がM写本を含めその多くを統合的に校訂している。<sup>25</sup>それらに加えて、フランス国立図書館蔵一八七三番写本や同一一一三〇番写本、同一一八二七五番写本、ザンクト・ガレン修道院附属図書館蔵二五一番写本、ライデン大学図書館蔵二八番写本なども同一系統の写本として挙げられるだろう。G・グラウヘはミュンヘン州立図書館の写本目録において、M写本とL写本の二写本を『ソロモンの哲学』という同一テキストとして指摘しているが、<sup>26</sup>両写本の章構成がかなり異なること、その他傾向の写本が多数確認されること、さらにM写本よりもL写本の方が真正な読みを

保存していることなどを考慮すれば、より複雑な写本系譜を想定する必要があるだろう。<sup>32)</sup>

本邦訳では、底本として岩熊氏によるM写本の校訂を利用したが、適宜ダハンによるL写本の校訂も参照した。<sup>33)</sup>また、便宜上、オリゲネスとカッシアヌスの引用箇所については、校訂書の分割に則って、一部の章節番号を振り直した。<sup>34)</sup>両写本の構成の違いについては、本稿末尾の比較表を参照されたい。<sup>35)</sup>

## 『ソロモンの哲学の書』全訳

### I・1 [1]<sup>36)</sup>

したがって、もつとも賢明なるソロモンの教えに従えば、知恵を知りたいと願う人は道徳的な教育から始めなければならず、そして、次のように書かれていることを理解しなければならぬ。「あなたは知恵を渴望していた。戒めを守りなさい。そうすれば、主があなたに知恵を授けるでしょう」(「シラ書」一・二六)と。そこで、このことのために、最初に神的な哲学を人々に教えたこの教師(「ソロモン」は、自らの著作の序論として「箴言」の書を据えた。というのも、その書においては、われわれが語ったとおり、道徳的な箇所が伝えられており、その結果として、人が知的

史苑(第八一卷第一号)

な面と道徳的な面において前進したときには、自然的な理解に属する学問へと到るのであり、そして、またその学問において、人は諸事物の諸原因や諸々の自然本性を区別するため、「むなししいものなかも、むなししいもの」(「伝道の書」一・二)を放棄すべきであることと、他方で永遠的で恒久的なものへと急いで向かうべきであることに気づくのである。

### I・2 [1]<sup>38)</sup>

そしてそれゆえに、「箴言」の後に「伝道の書」へと到達されることになる。というのも、「伝道の書」は、われわれが語ったとおり、目に見える物質的なあらゆるものは脆く儂いものであることを教えるからである。そして、そうしたものが確かにその通りであると、知恵に専念する人がこうした事柄において把握するとき、その人は疑いなくそれらを軽蔑して吟味し、言わば、この世のすべてから身を引き、見えざる永遠なるものへと向かうのであり、そのことは、確かに、霊的な諸感覚によって、しかし、愛の秘めたる何らかの形姿をもって、「雅歌」において教えられているのである。

I・3 [1]<sup>39</sup>

それゆえ、実際のところ、この書(「雅歌」)は、人が道徳的な面において浄められ、そして可滅的な諸事物の知識や区別を学び知ったときに、その人へと到達されるべく、最後の箇所を占有しているのである。というのも、以上のこと「箴言」と「伝道の書」を学んだ後に「雅歌」を学ぶこと」によって、天上の花婿に対する花嫁の愛が、すなわち神の御言葉に対する完全な魂の愛が描かれ形作られているこうした形姿から、いかなる点においても害されることはあり得なくなるからである。つまり、それら「箴言」と「伝道の書」によって、魂は、行為と道徳を通じて浄められ、また、自然的な諸事物の区別について徹底的に教え込まれたことをもってして、教義的なものや神秘的なものへと適切に到達せしめられ、そして、澄み切った霊的な愛によって、神性の観想へと引き上げられるのである。

I・4 [1]<sup>40</sup>

しかしながら、最も賢明なるソロモンについて、彼が真の哲学の基礎を築き、生き方と教育の秩序を創設したことは知られていないわけではなく、また、理性的な箇所もソロモンによって放棄されてはいなかった。ソロモンは自らの「箴言」のすぐ冒頭で、何よりもまずもって、自らの書

を箴言と名づけたということを通じて、明証的に明らかにしている。というのも、「その箴言 (proverbium) という」名称は、表面上言われていることと、内面的に示唆されていることは別々のことであるということを、意味表示しているからである。実際、こうしたことを、箴言の一般的な使用法でも教えているのである。また、ヨハネは「福音書」において救世主が次のように言っていると書いている。「私は、これらのことをたとえ (proverbium) を用いて話したが、もはやたとえによらないで、はっきり父について告げる時が来る」(「ヨハネによる福音書」一六・二五)と。書名の題字そのものについて、さしあたりはこうした事例が当てはまる。

I・5 [1]<sup>43</sup>

続くところにおいて、ソロモンはただちに言葉の区分を付け加えて、知恵 (sapientia) から知識 (scientia) を区別しており、そして知識から学問 (disciplina) を区別している。また、彼は「これらの」言葉についての別の理解も提示し、人が言葉の奸策を排除することが出来るように、思慮 (prudentia) がその人のうちに存在するのだと言っているのである。さらに、彼は真の正義を判断の識別力から区別したが、しかし、自身が教える人々にとって必



要な術策なるものにも言及しており、私が信じるところで、それを通じて、<sup>45</sup>諸々の詭弁の狡猾さが理解され、回避されうるのである。そしてそれゆえに、疑いなく、神の御言葉について詭弁的な奸策によって欺かれることがないように、術策は知恵を通じて無垢なる人々へと与えられる」とソロモンは言うのである」(cf. 「箴言」一・二—三)。

I・6 [1]<sup>46</sup>

ところで、このことにおいても、「ソロモンは」理性的な学問に言及しているとわたしには思われる。というのも、言葉に関わるその学問を通じて、語られた事柄の意味表示が識別され、そしてそれぞれの言表の正確な意味が理性とともに区別されるからである。とりわけ、その学問に基づいて子どもたちが教育されることは適切である。というのも、「若い者に識別する力と理解する力を与えるために」(「箴言」一・四)と「ソロモンが」言うとき、彼はこうしたこと促しているからである。そして、こうした事柄において教育される人は、学んだ事柄を通じて、必然的に理性的な仕方で自分自身を支配し、その結果、自らの生をより節度あるものと釣り合わせるのであり、さらに彼は次のように言うのである。「さとい者は治める能力を得る」(「箴言」一・五)と。

I・7 [1]<sup>48</sup>

他方、その後で、彼は神的な諸々の言葉——そこでは、預言者を通じて人類に生きることの秩序関係が伝えられるのだが——においても、話しのような手法や語りの色々な種類があることを認識していた。そしてまた、そうしたものにおいては、譬え(parabola)と呼ばれる何らかの形や、隠喩(obscura dictio)と言われるもの、諸々の謎(enigmata)と名づけられるもの、また、諸々の賢者の語り(dista sapientium)と言われるものが内包されることも知っており、次のように書いている。「あなたは、譬えや隠喩、賢者の語り、謎を悟るでしょう」(「箴言」一・六)と。それゆえに、これら個々の事柄を通じて、彼は理性的な箇所を明快かつ明瞭に説明しており、そして古の人々の慣習に従い、簡潔で端的な文章をもって、優れて見事な考えを叙述したのである。

I・8 [1]<sup>49</sup>

もし、「神の掟について昼も夜も思いをめぐらす」(「詩編」一・二)ような人や、「知恵について思いをめぐらす正しき人の口」(「詩編」三六・三〇)ような人であるならば、その人は、以上の事柄をより注意深く探求して、見出すことができるだろう。しかしまた、その人が正しく問い求め、

そして、彼に「知恵の門戸が」開かれるように（cf.「コロサイの信徒への手紙」四・三）、また、聖霊から知恵の言葉と知識の言葉を受け取るに値し（cf.「コリントの信徒への手紙一」一・二・八）、「わたしの言葉をさし向けたが、あなたたちは聞こうとしなかった」（箴言一・二四）と「ソロモンが」言っていたその知恵の関与者となるように神に請い願うのであれば、その人は知恵の門戸を押し開く（ことができるだろう）<sup>50</sup>。

I・9 [1] <sup>51</sup>

そして、ソロモンは正当にも、人間の心において神が言葉を扱ったと語っている。というのも、先にわれわれが語ったとおり、神は人間に心の広さを与えたからである。確かに、神秘的な事柄において簡潔に語られた事柄を、神の書物から採られた諸々の主張<sup>52</sup>において、より広範な教えによって説明することができる人の心は広げられているからである。

I・10 [1] <sup>53</sup>

それゆえ、もし、「箴言」において指定されている「習慣を改善すること」と「掟を遵守すること」に関する最初の段階を満たし、しかし他方で、こうした事柄の後に、世

の空しさに気づかされ、移ろいゆく諸事物の儚さが見通されたのであれば、人は世界と世界のうちにあるすべてのものを放棄することへ向かい、「見えざる永遠のもの」（「コリントの信徒への手紙二」四・一八）を観想し熟慮することにもまた到るのである。

I・11 [1] <sup>54</sup>

しかし、そうした事柄へとわれわれが到達しうるためには、もし偶然に、神の御言葉の美しさが入念に調べられることがあったときに、神へと向かう救済をもたらす愛によって駆り立てられ、結果として、神自身もまた、自身への願望を抱いていると見通してきたこうした魂を「愛するに」相応しいと判断してくださるのであれば、神の慈悲を必要とするのである。

II・1 [2.0] <sup>55</sup>

ソロモンは、教会の多種多様な恩寵を列挙したときに、「皆、彼女のそばで、二重の衣を重ねている」（「箴言」三一・二一）と付け加えたが、この文言は、行為的な哲学（actualis）の徳と思弁的な哲学（inspectiva）の徳とによって裝飾された女性を意味表示しており、これらを、ギリシア人たちは実践的哲学（πρακτική）と理論的哲

学 (θεοπικη) と呼んでいる。

II・2 [2.1]<sup>(57)</sup>

実践的哲学、すなわち、行為的な哲学は、あらゆる信仰者にとつて共通的であり、そして、多くの専門や研究へと派生する。<sup>(57)</sup> 例えば、次のようなものである。「わたしは飢えていたので、あなたは私に食べさせ、云々」(「マタイによる福音書」二五・三五) というのは、敬虔の義務である。というのも、「行いの伴わない信仰は役に立たないからである」(「ヤコブの手紙」二・二〇)。

II・3 [2.2]<sup>(58)</sup>

理論的哲学、すなわち、思弁的な哲学は、見られるものではなく、むしろ見られないものを追い求める。例えば、「見えているものを、誰が望むでしょうか？ わたしたちは、目に見えないものを望んでいるから、忍耐して待ち望むのです」(「ローマの信徒への手紙」八・二四―二五) といったようにである。こうした事柄は、さらに、存在するとおりに常に存続し、そうした事柄へと向け、キリストの恩寵を通して、信仰する魂が支えられるのである。

II・4 [2.3]<sup>(59)</sup>

ところで、この思弁的な哲学は、二つのものへと区分される。すなわち、「歴史的解释」(historica interpretatio) と「霊的理解」(spiritualis intellegentia) である。

II・5 [2.4]<sup>(60)</sup>

歴史「的解释」は単純である。教えとは、歴史の順序を端的に展開させる。というのも、そこにおいては、言葉と共鳴する理解以外には、いかなる秘められた理解もないからである。例えば、「わたしがあなたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが死んだことです」(「コリントの信徒への手紙一」一五・三) や、「神は、その御子を女からお遣わしになった」(「ガラテヤの信徒への手紙」四・四)、そして、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」(「申命記」六・四) といったようなものがある。

II・6 [2.5]<sup>(61)</sup>

霊的理解は三つの部分からなる。というのも、霊的理解は、比喩、寓意、神秘の三つへと区分されるからである。そしてそれゆえ、思弁的な哲学と言われるのは、われわれが見られうる事柄を超えて、神的な事柄や天上的な事柄に

ついで何らかのことを観想し、そしてそれは物體的な視野を超えて、ただ精神だけによってそれらの事柄を直視するからである。比喩とは、すなわち道徳の教育である。寓意とは、すなわち文飾的な表現法である。神秘とは、すなわち天なるものへと上昇するものである。

II・7 [2.6]

これら四つのもの、すなわち、歴史、比喩、寓意、神秘について、使徒は次のように言っている。「だから兄弟たち、わたしがあなたがたのところに行つて異言を語つたとしても、啓示 (revelatio) か知識 (scientia) か預言 (prophetia) か教え (doctrina) の何れかによつて語らなければ、あなたがたに何の役に立つでしょう」(「コリントの信徒への手紙一」一四・六)と。

II・8 [2.6]

啓示は寓意に属する。例えば、「われわれの先祖は皆、雲の下にいた、云々」(「コリントの信徒への手紙一」一〇・一)といったようなものである。というのも、真理において生み出される事柄は、他の秘跡の形相を予示したと言われるからである。

II・9 [2.6]

知識とは比喩のことである。すなわち、生の改善と行爲的な教育を目指す道徳的な説明である。それはあたかも、われわれが二つの契約を実践的学問 (practica disciplina) と理論的学問 (theorica disciplina) として理解するものなものであり、また人間の魂をエルサレムないしはシオンとして理解するようなものである。

II・10 [2.6]

預言は神秘に属する。というのも、それは靈的な秘跡から何らかのより崇高でより秘められた天上の秘儀へと上昇するものだからであり、また、使徒によつて次のように付け加えられる。「天のイエルサレムは、いわば自由の身女である、云々」(「ガラテヤの信徒への手紙」四・二六)と。

II・11 [2.6]

教えとは、歴史の順序を端的に展開させる。というのも、そこにおいては、言葉と共鳴する理解以外には、いかなる秘められた理解もないからである。例えば、「わたしがあなたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが死んだことです」(「コリントの信徒への手紙一」一五・三)といったようなものである。

II・12 [2.7]

これら四つの諸部分は、一つのものにおいて等しく適用しうる。例えば、「一つの」エルサレムは、歴史に従えばユダヤ人たちの国であり、寓意に従えばキリストの教会であり、神秘に従えば天上の国であり、比喩に従えば主によって、この名において非難されたり賞讃されたりする人間の魂である、といったようにである。

III・1 [3.0]

哲学はまず三つのもの、すなわち、理論的哲学 (theoretical)、実践的哲学 (practica)、論理学 (logica) に区分される。これら三つの部分は、各々の下位区分を次のように含んでいる。

III・2 [3.1]

理論的哲学、すなわち観想的な哲学 (contemplativa) は、神学 (theologia)、自然学 (phisica)、数学 (mathematica) の三つへと下位区分される。神学とは、神的事柄に関する認識である。自然学とは、自然的な諸事物に関する入念な探究である。数学とは、暗記されるべき事柄について利用されるものである。そしてまた、数学自体も、幾何学 (geometrica)、算術 (arimetica)、天文学 (astronomia)、

音楽 (musica) の四つに派生する。

III・3 [3.2]

実践的哲学、すなわち行為的な哲学 (actualis) も同じく、倫理学 (ethica)、すなわち道徳的な学問 (morals) と、家政学 (economica)、すなわち家計管理に関わる学問と、政治学 (politica)、すなわち国家に関わる学問 (civilis) との三つに区分される。

III・4 [3.3]

論理学も同じく、弁証法 (dialectica)、すなわち討論に関わる学問 (disputatoria) と、演示法 (ephidictica)、すなわち誇張表現に関わる学問 (demonstrativa) と、詭弁法 (sophistica)、すなわち欺きや偽りに関わる学問 (Fraudulenta ac ficta) との三つに区分される。

IV・1 [4.0]

哲学の区分。

IV・2 [4.1]

理論的哲学とは、すなわち観想的な哲学である。神学とは、すなわち神的事柄に関わるものである。自然学とは、

すなわち人間的ないしは自然的事柄に関わるものである。数学とは、すなわち暗記されるべき事柄に関わるものである。同じく、数学は幾何学、算術、天文学、音楽の四つに派生する。

IV・3 [4.2]

実践的哲学は上述の通りに区分される。

IV・4 [4.3]

論理学は上述の通りに区分される。

V・1 [5.0]

したがって、神の教会はソロモンによって書かれた三つの書物を認めている。第一に、それらの中から「箴言」の書が据えられる。第二に、「伝道の書」と呼ばれるもの(「が据えられ」、第三の場所では「雅歌」という書物がもたれる。

V・2 [5.1]

すなわち、この箇所においてわれわれに現前しうる事柄は、一般的な学問 (*generales disciplinae*) であり、それによって「人は」知識へと到達せしめられるのである。「その学問には」三つのものがあり、その学問をギリシア人た

ちは倫理学、自然学、観想学 (*epoptice*)<sup>(23)</sup> と呼んでいるが、われわれはこれを道徳的な学問 (*moralis*)、自然的な学問 (*naturalis*)、思弁的な学問 (*inspectiva*) と言うことができよう。

V・3 [5.2]

一方、ギリシア人たちのあいだでは、われわれが理性的な学問 (*rationalis*) と呼びうる論理学(「理性と言語に関わる学問」)<sup>(24)</sup> を第四のものとして数える人もいた。また別の人たちは、論理学は外側にはなく、むしろ、われわれが先に言及した三つの学問に依存しており、「それらの学問の」全体を通して結びついていると述べていた。実際、論理学とはこうしたものであり、あるいは、「(論理学とは)われわれが言うところでは、諸々の言葉や言明の合理的根拠を含み、その妥当性や非妥当性、類や種、あるいは個々の言明の形姿を教え込む理性的な学問である。というのも、確かに、この学問が、他の諸学問に加えられるほどには「他の諸学問から」切り離されてはおらず、織り込まれているということとは適切である。」<sup>(25)</sup>

V・4 [5.3]

他方で、道徳的な学問と言われるのは、その学問を通じ

て、より尊敬さるべき生の習慣が備えられ、そして徳へと向かう傾向性が準備されるからである。自然的な学問——ここでは、各々の事物の自然本性が論じられているが——と言われるのは、それが論じられることによって、「この世の」生においては如何なるものも自然本性に反して生み出されることはなく、むしろそれぞれのものが、神によって生み出された諸々の有用性に割り当てられるからである。思弁的な学問と言われるのは、われわれが見られうる事柄を超えて、神的事柄や天上的な事柄について何らかのことを観想し、そしてそれは物體的な視野を超えるので、ただ精神だけによってそれらの事柄を直視するからである。

V・5  
[5.4]<sup>(80)</sup>

ところで、私が思うに、ギリシア人の賢者たちはみな、ソロモンから「これらの学問を」借用した。というのも、ソロモンはその賢者たちよりもはるか以前の時代と時間に、神の霊を通じてそれらの事柄を学んでいたからである。その賢者たちは、「これらの学問を」あたかも自身らによって発明されたものとして公言し、彼らの教育に関する書物にまとめ、そのうえ、後世の人々に伝えられるべきものとして遺しておくとも公言したのである。しかしながら、われわれが語ったとおり、ソロモンはあらゆる人々よ

史苑(第八一卷第一号)

り前に「これらの学問を」得ており、神から受け取った知恵を通じて教えていた。次のように書かれている通りである。「神はソロモンに非常に豊かな知恵と洞察力と海辺の砂浜のような広い心をお授けになった。ソロモンの知恵は東方のどの人の知恵にも、エジプトのいかなる知恵にもまさった」(「列王伝一」四・二九—三〇)。

V・6  
[5.4]<sup>(81)</sup>

それゆえ、ソロモンは、先にわれわれが一般的な学問であると述べた三つの学問、すなわち、道徳的な学問、自然的な学問、そして思弁的な学問を相互に区別して分類することを意図して、それらの学問を、各々その順序において適切に合致する三つの書、すなわち、「箴言」「伝道の書」「雅歌」において広めたのだった。

V・7  
[5.4]<sup>(82)</sup>

「箴言」においては、倫理学、すなわち道徳的な学問(を広めた)。それゆえ、第一にソロモンは、適切にも、生の諸々の教えを簡潔かつ端的な文章によってまとめながら、道徳的な箇所を教えた。

V・8 [5.4]

「伝道の書」においては、自然学、すなわち自然的な学問〔を広めた〕。実際、ソロモンは自然的な学問と呼ばれる第二の箇所を「伝道の書」においてまとめている。というのも、そこにおいて彼は、自然的な諸事物について多くのことを論じつつ、空虚で無益な事柄を有益で必要不可欠な事柄から選別し、また、有益で正しき事柄が追求されるべきであることを忠告しているからである。

V・9 [5.4]

「雅歌」においては、観想学、すなわち思弁的な学問〔を広めた〕。彼は思弁的な箇所を、この書、すなわち「雅歌」へと伝えた。というのも、そこにおいて彼は、花婿と花嫁の像を超えて天上への愛と神的な事柄への願望を魂に吹き込み、その結果、神愛と愛情の途によって神との交わりへと到達すべきことを教えているからである。

VI・1 [6]

ところで、私の思うところによれば、この神的な哲学の三重構造は聖なるもつとも幸いなる人々のうちに前もって示されており、彼らのいとも聖なる教育ゆえに、最上なる神は「彼らが」「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」

（「出エジプト記」三・十六）と呼ばれることをよしとされた。

VI・2 [6]

たしかに、アブラハムは従順を通じて倫理哲学を明らかにしている。実際、アブラハムの従順は非常に大きなものであったし、さらには、掟の遵守より前であっても「アブラハムは従順であった」。例えば、「生まれ故郷、父の家を離れよ」（「創世記」一一・一）と聞いたとき、彼は躊躇うことなく直ちに行動に移したし、それどころか、より多くのことを行った（cf. 「創世記」二二・二―一九）。自身の息子を生け贄に捧げよと聞いたときも、疑うことなく命令に従い、倫理哲学が存するところの従順の例しを後代の人々に与えるべく、自分の独り子をも惜しむことはなかった（cf. 「創世記」二二・一六）。

VI・3 [6]

同様にイサクも、井戸を掘り、諸事物の深淵を探求するとき（cf. 「創世記」二六・一五―二五）、自然哲学を教えている。他方で、ヤコブは思弁的な域にある。というのも、神的な事柄への観想ゆえにエルサレムと名づけられ（cf. 「創世記」三二・二九）、また、天の陣営（cf. 「創世記」三二・三）や神の家（cf. 「創世記」二八・一七）、天使たち



の通り道を見た彼は、天まで伸ばされた梯子を眺めていたからである (cf. 「創世記」二八・一二)。

VI・4 [6]<sup>94</sup>

したがって、正当にも、われわれはその三人の至福なる人たちが神への祭壇を築いたことを (cf. 「創世記」一二・七―八、二二・九、二六・二五、三三・二〇、三五・七)、すなわち、哲学の進歩を神に捧げたことを見いだす。というのも、確かに、そのことよって、彼らは哲学の進歩が人間の業 (*artes*) ではなく神の恩寵に帰されるべきであることを教えているからである。ところで、彼らは幕屋で暮らしていたが (cf. 「ヘブライ人への手紙」一一・九)、それは、そのことを通じて、神的な哲学を研究する人にとつては、如何なる所有物も地上においてもたれるべきではなく、また、場所から場所へというよりは、低次の事柄の知識から完全な事柄の知識へと、つねに進められるべきであることを明示するためなのである。

【謝辞】 本稿の執筆にあたり、翻訳に関して甚大なご支援を賜った辻内宣博先生 (早稲田大学商学大学院准教授)、および、校訂史料の使用を快諾してくださった岩熊幸男先生 (福井県立大学名誉教授) に心より御礼申し上げます。無論、構文の理解や訳語の選択など、あらゆる文責は筆者に帰します。

【略号】 CCSL: Corpus Christianorum Series Latina; CSEL: Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum; PL: Patrologia Latina; SC: Sources Chrétiennes.

## 『ソロキンの哲学の書』(回部)

## M写本とL写本の構成比較

			München, Clm 6407		London, Bl. Royal 7 D II			
章	節	岩熊氏による校訂	葉	イソキベツト	典拠	ダハツによる校訂	M写本の葉節	葉
	1	1	82r	Oporet igitur...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 14	p. 155	VI, 1	3r
	2	”	82r-v	Et ideo post Proecheia...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 15	pp. 155-156	VI, 2	3r
	3	”	82v	Ideo enim nouissimum locum...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 16	p. 156	VI, 3	3r
	4	”	82v-83r	Haec uero sapientissimo salomone...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 8	”	VI, 4	3v
	5	”	83r	In sequenti uero subiungit...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 9	”	V, 6	3v
I	6	”	83r-v	Sed et in hoc uidetur mihi...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 10	”	V, 7	3v
	7	”	83v-84r	Post he uero cognoscens...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 11	”	V, 8	3v
	8	”	84r	Quae, si quis est qui...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 12	”	V, 9	3v
	9	”	84r	Et merito extendere se dicit...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 13	pp. 156-157	V, 3	3v-4r
	10	”	84r-v	Si quis ergo primum locum...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 22	p. 157	I, 1	4r-v
	11	”	84v	Ad que tamen ut peruenire...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 23	”	I, 2	4v
	1	2.0	84v	Salomon cum ecclesiae...	<i>cf. Colationes</i> , XIV, viii, 1	”	I, 3	4v
	2	2.1	84v	ΠΠΑΚΡΙΚΗΝ id est acualis...	<i>cf. Colationes</i> , XIV, viii, 1	p. 157-158	I, 4	5r
	3	2.2	84v-85r	ΘΗΜΡΗΤΙΚΕΝ id est inspectum...	—	p. 158	I, 5	5v
	4	2.3	85r	Haec autem inspecta ditudur...	<i>Colationes</i> , XIV, viii, 1	”	I, 6	5v
	5	2.4	85r	Historia simplex est...	<i>Colationes</i> , XIV, viii, 7	p. 158-159	I, 7	5v-6r
II	6	2.5	85r-v	Spiritualis intellegentia triperita est...	<i>cf. Comm. in Cant. cant.</i> , Prolog., iii, 3 (= Cassiodorus, <i>Institutiones</i> , II, iii, 6)	p. 159	I, 8	6r
	7	2.6	85v	De his quattuor...	<i>Colationes</i> , XIV, viii, 4	”	I, 9	6r
	8	”	85v	Reclatio ad allegoriam pertinet...	<i>Colationes</i> , XIV, viii, 5; viii, 2	”	I, 10	6r-v

	9	”	85v	Scientia tropologica est...	<i>Collationes</i> , XIV, viii, 3	”	II, 11	6v
	10	”	85v	Prophetia ad anagogen pertinet...	<i>Collationes</i> , XIV, viii, 3	”	V, 1	6v
	11	”	85v-86r	Doctrina uero historiae ordinem...	<i>Collationes</i> , XIV, viii, 7	”	V, 2	6v-7r
	12	2,7	86r	Haec quattuor partes possunt...	<i>Collationes</i> , XIV, viii, 4	p. 159-160	V, 3	7r
III	1	3,0	86r	Philosophia tripartita primo diuiditur...	—	p. 160	V, 4	7r
	2	3,1	86r	Theorica, i.e. contemplatiua...	—	”	V, 5	7v
	3	3,2	86r	Practica, i.e. actualis...	—	”	II, 1	7v
	4	3,3	86r-v	Loica similiter tripartita subdividitur...	—	”	II, 2	7v-8r
IV	1	4,0	86v	Philosophiae diuisio.	—	pp. 160-161	II, 3	8r
	2	4,1	86v	Theorica id est contemplatiua...	—	p. 161	II, 4	8r
	3	4,2	86v	Practica diuiditur ut supra.	—	”	II, 5	8r
	4	4,3	86v	Loica ut sup(tra).	—	”	II, 6	8r
V	1	5,0	86v	Triā igitur uolumina ecclesia...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 1	”	II, 7	8r-v
	2	5,1	86v-87r	Quae ergo nobis occurrere possunt...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 1	”	II, 8	8v
	3	5,2	87r	Nominū sane apud grecos...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 1; iii, 2	”	II, 9	8v
	4	5,3	87r-v	Moralis autem dicitur...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 3	”	II, 10	8v
	5	5,4	87v	Haec ergo, ut mihi uidetur...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 4	”	II, 11	8v
	6	”	87v-88r	Salomon ergo tres sāsas quas...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 5	”	II, 12	9r
	7	”	88r	In prouerbis ethicam, id est moralem...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 6	p. 162	III, 1	9r
	8	”	88r	In ecclesiasten phisicam, id est naturalem...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 6	”	III, 2	9r
	9	”	88r	In cantica cantiquorum epopticon...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 7	”	III, 3	9r
	1	6	88r-v	Hanc ergo triplicem diuinae philosophiae...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 17	”	III, 4	9r-v
VI	2	”	88v	Abraham namque moralem declarat...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 18	”	”	”
	3	”	88v	Isaac quoque naturalem philosophiam...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 19	”	”	”
	4	”	89r	Unde et merito inuenimus...	<i>Comm. in Cant. cant.</i> , Prol., iii, 20	”	”	”

## 註

(一) “*divisio philosophiae*” は直訳すれば「哲学の区分」となるが、中世(少なくとも一二世紀以前)における哲学(*philosophia*)とは、神のあるいは人間の事柄に関する(*divinarum humanarumque rerum*)知識を包括する総合的な知の概念であった。この点で急がれている区分は個々の知識の包括する領域の策定であり、概念上その各々が学問的探求の対象として扱われてくることからは、本稿では「学問区分論」と読ませ、cf. Mariken Teeuwen, *The Vocabulary of Intellectual Life in the Middle Ages*, Turnhout: Brepols, 2003, pp. 395-99.

(二) Boethius, *Isagogen Porphyrii commentorum, editio prima*, I, 3, CSEL 48, pp. 7-9; Cassiodorus, *Institutiones divinarum et saecularium litterarum*, II, iii, 3-7, R. A. B. Mynors, (ed.), *Cassiodori Senatoris Institutiones*, Oxford: Clarendon Press, 1937, pp. 110-112; Isidorus, *Etymologiae*, II, xxiv, W. M. Lindsay, (ed.), *Isidori Hispalensis Episcopi Etymologiarum sive Originum Libri XX*, Oxford: E Typographeo Clarendomiano, 1911, II, xxiv. 古代中世全体を俯瞰した学問区分論の歴史の概説として、Joseph Marétan, *Problème de la classification des sciences d'Aristote a St-Thomas*, Paris: Imprimerie St-Augustin, 1901; James A. Weisheipl, “Classification of the Sciences in Medieval Thought,” *Medieval Studies*, 27, 1965, pp. 54-90; Idem, “The Nature, Scope, and Classification of the Sciences,” in *Sciences in the Middle Ages*, Chicago: Chicago University Press, 1980, pp. 461-

82. 初期中世の学問区分論については、Bernhard Bischoff, “Eine Verschoffene Einteilung der Wissenschaften,” *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen âge*, 25, 1958, pp. 5-20; Manuel C. Diez y Diez, “Les artes libérales d'après les écrivains Espagnols et Insulaires aux VII<sup>e</sup> et VIII<sup>e</sup> siècles,” in *Arts libéraux et philosophie au moyen âge, Actes du quatrième congrès international de philosophie médiévale 27 août 2 Septembre 1967*, Montréal/Paris: Institut d'études médiévales, 1969, pp. 37-46; Michael Evans, “The Ysagoge in Theologiam and the Commentaries Attributed to Bernard Silvestris,” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 54, 1991, pp. 1-42; Yukio Iwakuma, “The Division of Philosophy and the Place of the Trivium from the 9th to the Mid-12th Centuries,” in *Medieval Analyses in Language and Cognition: Acts of the Symposium the Copenhagen School of Medieval Philosophy, January 10-13, 1996*, Copenhagen: Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab, 1999, pp. 165-90; Irene O'Daly, “Diagrams of Knowledge and Rhetoric in Manuscripts of Cicero's De Inventione,” in *Manuscripts of the Latin Classics 800-1200*, Leiden: Leiden University Press, 2015, pp. 77-105.

(三) 『雅歌註解』の標準的な底本としては依然としてヴェーレンスの校訂が用いられているが、章節の分割が不十分であるため、本稿ではブレザール・ヒケル・シエールによる羅仏対訳(50版)の章節番号に従った。W. A. Baehrens, *Origines*

*Mathäuserklärung*, Leipzig: J. C. Hinrichs, 1925; Luc Brésard and Henri Crouzel, *Commentaire sur le Cantique des cantiques*, SC 375, Paris: Éditions du Cerf, 1991. 『雅歌註解』のギリシア語原典は現存せず、いくらか註釈が施されたルフィヌス (Rufinus, c. 344-411) によるラテン語訳のみが現代まで伝わっている。『ソロモンの哲学』に引用されているテクストもルフィヌスによるラテン語訳版であり、本解説もそれに則している。

- (4) ラテン語で書かれた学問区分論のテクストにおいては、一つの学問の名称として複数の語彙が充てられていることが往々にしてある。これはラテン語訳者がギリシア語のテクストを翻訳する際、原文のギリシア語をそのまま音写した場合 (ときにギリシア文字のまま筆写される *γλωσσισμολογία*) と、それに相当するラテン語の語彙を併記した場合とがあつたことに由来する。例えば、*“naturalis, quae graece physica appellatur”* や *“physica, id est naturalis”* などといった表現が頻繁に使用される。(*γλωσσισμολογία* はギリシア語表記とその音訳を示し、ラテン語独自の語彙 (たいていの場合、中性の形容詞で表現される) が用いられる場合はそれも併記する。綴りはとくに断りがない限り以下の辞書の見出し語に従うが、一定数の異なる綴りの写本が存在する場合は「」で示す。Henet G. Liddle and Robert Scott et al. (eds.), *A Greek-English Lexicon*, Oxford: Oxford University Press, 1940; Charlton T. Lewis and Charles Short (eds.), *A Latin Dictionary*, Oxford: Oxford University Press, 1879.

(5) *Comm. in Cant. cant.*, Prologus, iii, Bahrens, pp. 75-

史苑 (第八一卷第一号)

79; SC, pp. 127-143. など *“epoptice”* という語彙は、写本に於いては *“poptice”* や *“enoptice”*、*“noptice”* などと様々な表記揺れが認められるが、*γλωσσισμολογία* の見解に従って、もともとギリシア語の原表記に近いとされる *“epoptice”* で統一する。この語彙に関する議論については J. Kirchner, “Origène, Commentaire sur le Cantique, prol.,” *Studia Patristica*, 10, 1967, pp. 230-35; Pierre Hadot, “Les divisions des parties de la philosophie dans l’antiquité,” *Museum Helveticum*, 36, 1979, pp. 201-23, esp. 218-220; Brésard and Crouzel, *Commentaire*, p. 128, n. 1; “Époptice,” in *ibid.*, p. 755. また、ルフィヌスはこの学問がラテン語話者の間では「思弁的 (哲学) (inspectiva) と呼ばれていると述べている。後述のように inspectiva という語彙はカッジオトルスによって、アリストテレス的区分法における「理論的哲学」の訳語としても用いられるようになるが、その意味はアリストテレスの区分に則り、いくぶん拡張されたものとなる。

(6) ルフィヌス訳『雅歌註解』において、第四の学問は *logical/rationalis* という語彙をもつて論じられているが、これは厳密な意味での現代的な「論理学」とはごく大ん異なっている。詳細は、本邦訳の註七五を参照のこと。

(7) ソロモンの三著と学問区分の関係については Sandro Leanza, “La Classificazione Dei Libri Salomonici e i Suoi Riflessi Sulla Questione Dei Rapporti Tra Bibbia e Scienze Profane, Da Origene Agli Scrittori Medioevali,” *Augustinianum*, 14, 1974, pp. 651-66; Johanna von Gottfried, “A Matter of Context: Early Medieval Use of

Origen's Discussion of the Arts," *A Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 8, no. 1, 1977, pp. 15-26; Marguerite Harl, "Les trois livres de Salomon et les trois parties de la philosophie dans les prologues des Commentaires sur le Cantique des cantiques (d'Origène aux Chânes exégétiques grecques)," in *Texte und Textkritik*, Berlin: Akademie Verlag, 1987, pp. 249-269.

(8) オリゲネスは『雅歌註解』において、論理学、自然学、観想学、論理学(なごしは理性と言語に関わる学問)の四学問を主要な学問分類であると考えているが、四世紀以降、少なくとも語彙のうえでは、神に関する学問(オリゲネスの区分では観想学に相当)と logica を同一視する傾向が現れる。例えば、ヒエロニムスやそれを引用したイシドールの著作には、"de logica, pro qua nostri theologiam sibi vindicant" という表現が見られる(画者とも写本によつては theologia が theoretica となることゝの例もある)。Hieronymus, *Epistola*, XXX, i, 1, CSEL 54, p. 243; Isidorus, *Etyimologiae*, II, xxiv, 8. この傾向は、アルクインやラバヌス・マウルス、オータンのカノリウスらにも継承されていくであろう。Alcuin, *De dialectica*, PL 101, col. 952C; Rabanus Maurus, *De universo*, PL 111, col. 416C; Honorius of Autun, *In Psalmis*, PL 172, col. 270B. 他方、マンブロシウスと大ゼレムリウスは、論理学、自然学に連なる第三の学問として、各々 "mystica" と "contemplativa(theoretica)" を挙げている。Ambrosius, *Explanatio Psalmi*, XXXVI, 1, CSEL 64, p. 70f.; Gregorius Magnus, *In Canticum canticorum*, 9, CCSL 144, p. 12.

(9) Cassianus, *Conlationes*, CSEL 13. 次の羅仏対訳(その版)を参照。E. Pichery, (ed.), *Jean Cassien, Conférences*, 2 vols., SC 54, Paris: Les Éditions du Cerf, 1958.

(10) *Geoprakt/theoretica* には、よく多くのラテン語訳が存在している。アリストテレスは倫理学や政治学など実際の行動をともなう実践的哲学との対比において、"自然学や数学、形而上学などを包括する思弁的な学問領域として *Geopraktik* を指定したが、キリスト教徒はこれをキリストの神に対する学問も包括する区分と捉えた。アリストテレスの区分法を後世に伝えたカッシオドルスやイシドールらは *Geopraktik* のラテン語訳に "inspectiva" (思弁的(哲学))を用い、またセネカやアウグスティヌス、ランのハウケリウス(Eucherius of Lyon, c. 380-c. 449) などは "contemplativa" (観想的(哲学))、ホエライウスはこれに "speculativa" (観照的(哲学))という訳語を与えた。本邦訳では、文脈に合わせて、これらの中性名詞のあとに「哲学」なごしは「学問」を補って訳出している。Cassiodorus, *Institutiones*, II, iii, 6-7, p. 111f.; Isidorus, *Etyimologiae*, II, xxiv, 3; Seneca, *Epistulae*, XCV, 10, L. D. Reynolds (ed.), *L. Annaei Senecae Ad Lucillum epistulae morales*, vol. 2, Oxford: Clarendon Press, 1965, p. 384; Augustinus, *De civitate Dei*, VIII, 4, CSEL 40, pp. 358-60; Eucherius of Lyon, *Formulae sapientialis intellegentiae*, Praef. CCSL 66, p. 4; Boethius, *Isag. comm., editio prima*, I, 3, pp. 7-9. 以下を参照。Thesaurus linguae Latinae, vol. 4, "contemplativus," col. 649; Ibid, vol. 7/1, "inspectivus," col. 1945; Daham, "Origène et Jean Cassien...", p. 146.

- (11) *Conlationes*, XIV, viii, CSEL, pp. 404-407; SC, pp. 182-207.
- (12) "Prima iparkukri, id est actualis, quae emendatione morum et uitorum purgatione perficitur." *Conlationes*, XIV, ii, 1, CSEL, p. 399; SC, p. 184. なお、下位区分に関する箇所は『ソロモンの哲学』には引用されていない。
- (13) 似たような区分論はランのエウケリウスにも確認される。彼は「われらが宗教のあらゆる学問」(Omnis autem disciplina nostrae religionis)は「二重の知識の泉」(duplex scientiae fons)「すなわち『実践的哲学』と『理論的哲学』(historica disputatio)と「霊的理解」に分けてこそ。
- (14) 聖書の解釈技法については以下を参照。Henri de Lubac, *Exégèse médiévale: les quatre sens de l'Écriture*, 3 vols., Paris: Aubier, 1959-64.
- (15) "Lettera gesta docet, quid credas allegoria, moralis quid agas, quo tendas anagogia." Augustinus of Dacia, *Rotus pugillaris*, I, (ed.) A. Walz, *Angelium*, 6, 1929, p. 256. しばしば、歴史は文字 (littera) に、比喩は道徳 (moralis) に換言されることがあるが、意味は同じである。
- (16) 理論的哲学の下位区分として現れる神学 (theologia) という語彙は、少なくとも初期中世においてはキリスト教神学の意味合いで用いられることは少なかった。アリストテレスは自身の形而上学 (metaphysica) に相当する学問として theologia を指定しており、中世においてはその残滓として枠組みのみが残っていたと言えよう。theologia がキリスト教神学を指す現代的な意味で一般に使用されるように

史苑 (第八一卷第一号)

- なるのは、一二世紀のラベラルドゥウス以降であると思われる。Aimé Solignac, "Théologie. Le mot et sa signification," in *Dictionnaire de spiritualité*, vol. 15, Paris: Beauchesne, 1991, pp. 463-87.
- (17) 論理学を弁証法、演示法、詭弁法の三つに区分する方法の典拠は、ボエティウスの『トピカ註解』(In Cicerois topica commentorum) および『トピカの差異について』(De topicis differentiis) にある可能性が考えられるが、確認はなさず。Boethius, *Cic. top. comm.*, PL 64, col. 1040-1074; *De top. diff.*, PL 64, col. 1073-1216.
- (18) この議論については、Pierre Hadot, "La logique, partie ou instrument de la philosophie?," in *Commentaire sur les Catégories*, Leiden: Brill, 1990, pp. 183-88.
- (19) 哲学を理論的哲学、実践的哲学、論理学の三部門に区分する方法は、九世紀以前には明確な単一の典拠が確認出来ない。しかしながら、ボエティウスは『ポルフェリオス註解』(第一・第二公刊本)において、アリストテレスの区分法に従いつつ、論理学を哲学の一部とこの組み込みうる可能性について言及している。Boethius, *Isag. comm. ed. prima*, I, 3-4, pp. 7-9; *ed. secunda*, CSEL 48, pp. 140-43. なお、アリストテレスの区分法に依拠しつつも、論理学を哲学の一部と考える思想は一二世紀以降に大きく普及する。例えば、サン・ヴィクトルのフーゴ (Hugh of St. Victor, c. 1096-1141) の『ディダスカリコン』(Didascalicon) における区分論は有名である。Didascalicon, II, 1-3, C. H. Buttimer (ed.), *Hugonis de Sancto Victore Didascalicon de studio legendi*,

- Washington, D.C.: The Catholic University Press, 1939, p. 12-22. ノーキは実践的哲学' 理論的哲学' 論理学に加えて機械学 (mechanica) の哲学の一部に加えていふ。cf. Weisheipl, "Classification of the Sciences...", pp. 65-67.
- (20) München, Bayerische Staatsbibliothek, Clm 6407, ff. 82r-89v. <<http://daten.digital-sammlungen.de/~db/0003/bst/00036088/images/>> 以下、オニンニン・ブーカイブが存在する場合はそのアクセス先も記載する。アクセス日はすべて二〇二〇年六月。
- (21) Bernhard Bischoff, *Die Süddeutschen Schreibschulen und Bibliotheken in der Karolingerzeit*, 3rd ed., Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1974, p. 149f. 次を参照。E. A. Lowe (ed.), *Codices Latini Antiquiores: a Palaeographical Guide to Latin Manuscripts Prior to the Ninth Century*, Oxford: Clarendon Press, 1934-1966, no. 1282; Heinz Löwe, "Zur Geschichte Wizozs," *Deutsches Archiv für Geschichte des Mittelalters*, 6, 1943, pp. 363-73.
- (22) Susan A. Keefe, *A Catalogue of Works Pertaining to the Explanation of the Creed in Carolingian Manuscripts*, Turnhout: Brepols, 2012, p. 279f. 以下詳細な写本の構成について Günter Glauche, *Katalog der lateinischen Handschriften der Bayerischen Staatsbibliothek München: Die Pergamenthandschriften aus dem Domkapitel Freising*, vol. 2: Clm 6317-6437, Wiesbaden: Harrassowitz, 2011, pp. 206-11.
- (23) London, British Library, Royal 7 D II, ff. 3r-9v. <[http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Royal\\_MS\\_7\\_D\\_II](http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Royal_MS_7_D_II)> 写本の構成について George F. Warner and Julius P. Gilson, *Catalogue of Western Manuscripts in the Old Royal and King's Collections*, vol. 1, London: British Museum, 1921, pp. 185-88.
- (24) Gilbert Dahan, "Origène et Jean Cassien dans un *Triber de philosophia Salomonis*," *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen âge*, 52, 1985, pp. 135-62.
- (25) Bischoff, "Eine Versholene Einteilung..." pp. 5-20; Martin Grabmann, *Geschichte der scholastischen Methode*, vol. 2, Freiburg: Herber, 1911, p. 43; 非熊氏はリベットの校記を本ノートで公開している。<[www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/Transsc/Trifarie1.pdf](http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/Transsc/Trifarie1.pdf)> <[www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/Transsc/Trifarie2.pdf](http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/Transsc/Trifarie2.pdf)>
- (26) Paris, Bibliothèque Nationale de France, lat. 1873, ff. 109r-110r, s. XII.
- (27) <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9076504g/>>
- (28) Paris, Bibliothèque Nationale de France, lat. 11130, ff. 85r-86r, s. XIII.
- (29) <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90783972/>>
- (30) Paris, Bibliothèque Nationale de France, lat. 18275, ff. 20v, s. XII.
- (31) <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90672121/>>
- (32) Sankt Gallen, Stiftsbibliothek, Cod. Sang. 251, pp. 183-185, s. IX. cf. O'Daly, "Diagrams of Knowledge..." pp. 93-96.
- (33) <<https://www.e-codices.unifr.ch/en/list/one/csg/0251/>>
- (34) Leiden, Bibliotheek der Universiteit, B.P.L. 28, ff. 1r-



2v; s. IX; cf. Ibid.

<<https://socrates.leidenuniv.nl/view/lem/1652555/>>

- (31) Glauche, *Katalog der lateinischen Handschriften...*, pp. 206-11. なお、『シロモンの哲学の書』(*Liber de philosophia Salomonis*) という表題は両写本とも書かれていない。一六一七世紀に工写本を所有していたイギリスの数学者ジョン・ディー(John Dee, 1527-c. 1679)の蔵書目録には“De philosophia Salomonis”と書かれており、慣習的にそのように呼ばれる。J. O. Halliwell (ed.), *The Private Diary of Dr. John Dee, and the Catalogue of his Library of Manuscripts*. London: The Camden Society, 1842, p. 84, no. 166; cf. Dahan, “Origène et Jean Cassien...” p. 135f.
- (32) 本テキストについては、目下準備中の拙稿において、より詳細な分析を行う予定である。
- (33) <<http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/Transc/MuenchenCIm6407.pdf>> 岩熊氏の校訂では、このテキストはオリゲネスの『雅歌註解』序文として扱われている。
- (34) 〔〕内に岩熊氏による校訂の章節分割を示す。また、オリゲネスとカッシヤヌスからの引用箇所は註に附記するが、すべての箇所が逐語的な引用であるとは限らないことは留意されたい(とくに大きく改変されている箇所については、cf.として示す)。正確な引用部分については、岩熊氏やダハンの校訂を参照のこと。訳出に際して、基本的にはすべて筆者の訳になるが、引用部分については以下の現代語訳も参考にした。〔小高毅訳』『雅歌註解・講話』(創文社、一九七二年)、および前出の羅仏対訳(SC版)も参照。聖

書からの引用に関しては新共同訳に従ったが、一部本文に合わせて改変した。

- (35) ただし、M写本とI写本の校訂は岩熊氏とダハンがそれぞれ独立して行っており、その比較校訂は未だ為されていない。
- (36) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 14, Baehrens, p. 77f.; SC, pp. 136-39.
- (37) M写本では“ad eternam et perpetuam”となっているが、I写本の“ad eterna et perpetua”を採った。
- (38) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 15, Baehrens, p. 78; SC, p. 138f.
- (39) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 16, Baehrens, p. 78; SC, pp. 138-141.
- (40) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 8, Baehrens, p. 76; SC, p. 133f.
- (41) 「真の哲学」(vera philosophia[ $\epsilon\pi\tau\eta\mu\varsigma$   $\phi\iota\lambda\sigma\sigma\phi\iota\alpha$ ]) とは、ギリシア哲学に対するキリスト教的知恵の優越を主張する文脈において、後者を指す言葉としてしばしば用いられる。早くは、オリゲネスの師にあたるアレクサンドリアのクレメンス(Clement of Alexandria, c. 150-c. 215)の『ストロメテイス』(*Stromateis*)に見られる。Stromateis, I, xxi, 2; V, cxli, 4. [秋山学訳]『ストロメテイス(綴織)』(教文館、二〇一八年)、一八頁、以下も参照。Bérsard and Crouzel, “La vraie philosophie,” in *Commentaire*, p. 756f. より一般的には Giulio d’Onofrio, *Vera Philosophia: Studies in Late Antique, Early Medieval, and Renaissance Christian Thought*, (trans.), John Gavin, Turnhout: Brepols, 2008.

- (42) M写本では“vere philosophiae fundamenta ponentem ad ordine...quod non latuerit”とあり、I写本の“vere philosophiae fundamenta ponentem et ordinem...quod non latuerit”を採った。
- (43) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 9, Baehrens, p. 76f.; SC, p. 134f.
- (44) オリゲネスは「*σοφία*」神的な事柄に関わる *sapientia* に対置される、人間のないしは物質的な *scientia* および *disciplina* に「*σοφία*」の別の理解として、*prudencia* を挙げているように思われる。イシムルスは「言葉の差異に「*σοφία*」(*De differentius verborum*) に「*σοφία*」*scientia* が現世的な事柄を思索するのに対して、*sapientia* は永遠的な事柄を観想するため、区別され、*σοφία*、*scientia* は「*σοφία*」*prudencia* は人間の活動に関わるがゆえ、神に関わる *sapientia* と区別される」と考える者もいたと述べている。『*De diff. verb.*」, PL 83, II, xxxviii, 147. これらの語彙の親近性と差異について、Teeuwen, *The Vocabulary of Intellectual Life...*, pp. 358-360; Joseph W. Koterski, *An Introduction to Medieval Philosophy: Basic Concepts*, Chichester: Wiley-Blackwell, 2009, pp. 11-37.
- (45) M写本では“post quam”となっているが、I写本の“per quam”を採った。
- (46) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 10, Baehrens, p. 77; SC, p. 134f.
- (47) M写本では“vitam suam moderatius liberat”とあり、I写本は“vitam suam moderatius liberat”を採った。
- (48) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 11, Baehrens, p. 77; SC, pp. 134-137.
- (49) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 12, Baehrens, p. 77; SC, p. 136f.
- (50) M写本では“pulsauerit ostium sapientiae”とあり、I写本の“pulsauerit ostium sapientiae”を採った。
- (51) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 13, Baehrens, p. 77; SC, p. 136f.
- (52) M写本では“cor qui postea...explanare”となっているが、I写本の“cor qui potest...explanare”を採った。
- (53) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 22, Baehrens, p. 79; SC, p. 142f.
- (54) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 23, Baehrens, p. 79; SC, p. 142f.
- (55) cf. *Collationes*, XIV, viii, 1, CSEL, p. 404; SC, p. 189f. 『談話集』原典には見られない表現が多く含まれる。
- (56) cf. *Ibid.* 『談話集』原典には見られない表現が多く含まれる。
- (57) 『ソロキンの哲学』では引用やれていないが、『談話集』原典ではよく「習慣の矯正」(emendatio morum) と「悪徳の浄化」(vitiarum purgatio) が実践的哲学に属する下位区分として挙げられている。『*Collationes*, XIV, viii, 1, CSEL, p. 406; SC, p. 189f.
- (58) この節は『談話集』には見られない。
- (59) cf. *Collationes*, XIV, viii, 1, CSEL, p. 406; SC, p. 189f.
- (60) *Collationes*, XIV, viii, 7, CSEL, p. 406f.; SC, p. 192f.
- (61) cf. *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 3, Baehrens, p. 75f.; SC, p. 130f.
- (62) M写本では“corporeum supergredimur aspectum”とあり、

いるが、その版の“corporeum supergrediuntur aspectum”を採った。

- (63) 「そしてそれゆえ(…)直視するからである」“qua supergressi visibilia de divinis aliquid et caelestibus contemplamur, eaque mente sola intuemur, quoniam corporeum supergrediuntur adspectum”とある一節はオリゲネスに由来するが (*Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 3)、『カッシオドルスの『聖俗学問綱要』やイシドロスの『語源考』にも直接的に引用されており、初期中世における理論的哲学(思弁的哲学/観想的哲学)の標準的な解説として頻繁に引き合いに出われる。cf. Cassiodorus, *Institutiones*, II, iii, 6, p. 111; Isidorus, *Etymologiae*, II, xxiv, 11; Alcuin, *De dialectica*, PL 101, col. 952C; Rabanus Maurus, *De universo*, PL 111, col. 416C. 『フロキオンの哲学』に於ては、「靈的理解」の説明として転用されている。なお、この部分は上写本には筆写されていない。(64) M写本では“allegoria, id est fugata”となつてゐるが、上写本の“allegoria, id est figurata”を採つた。
- (65) *Collationes*, XIV, viii, 4, CSEL, p. 405; SC, p. 191f.
- (66) *Collationes*, XIV, viii, 5, CSEL, p. 405f; SC, p. 191f; viii, 2, p. 190f.
- (67) *Collationes*, XIV, viii, 3, CSEL, p. 405; SC, p. 190f.
- (68) *Ibid.*
- (69) *Collationes*, XIV, viii, 7, CSEL, p. 406f; SC, p. 192f.
- (70) *Collationes*, XIV, viii, 4, CSEL, p. 405; SC, p. 191f.
- (71) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 1, Baehrens, p. 75; SC, p. 128f.

(72) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 1, Baehrens, p. 75; SC, p. 128f.

(73) M写本では“poplice”、上写本では“theorica”となつてゐる。この語彙については、本論解説の註五を参照。

(74) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 1, Baehrens, p. 79; SC, p. 128f.; iii, 2, Baehrens, p. 79; SC, pp. 128-131.

(75) 『雅歌註解』を通じてオリゲネスが言及してゐる logica は、厳密な意味において、アリストテレス的な「論理学」とは異なり、この場合は言語全般の規則を扱う学問として理解されてゐる。cf. Henri Crouzel, *Origène: et la "renaissance mystique"*, Paris: Desclée de Brouwer, 1961, pp. 249-253; P. W. Martens, *Origen and Scripture: the Contours of the Exegetical Life*, Oxford: Oxford University Press, 2012, pp. 77-79. レオヌスは logica の訳語として rationalis を充ててゐるが、これは λόγος が ラテン語の sermo や ratio の二つの意味を内包してゐることに起因して、この二つの ratio が形容詞化され logica の ラテン語訳として用いられるようになったと思われる。次の『語源考』における記述を参照。“Dicta autem logica, id est rationalis. Logos enim apud Graecos et sermonem significat et rationem.” *Etymologie*, II, xxiv, 7, 学問区分に於ける logica を rationalis と訳す伝統は広く受容され、例えば、アウグスチヌスは「…ラテン語のこの名称 (logica) は、今日の多くの著作家のめづだつた rationalis と呼ばれてゐる」と証言してゐる。“Quis una pars appellaretur physica, altera logica, tertia ethica (quarum nomina Latina iam multorum litteris frequentata sunt, ut naturalis,

- rationalis moralisque uocarentur).” *De civitate Dei*, XI, 25, p. 548.
- (76) 古代の論理学を巡る論争を反映していると思われる。本論の解説を参照。
- (77) M写本では“figurās...doctorum”となっているが、I写本の“figurās...dicatorum”を採った。
- (78) M写本では“non tam separari quam inseri ceteris conent et interit”となっているが、I写本の“...conentit et interit”を採った。
- (79) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 3, Baehrens, p. 75; SC, p. 130f.
- (80) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 4, Baehrens, p. 75f; SC, p. 130f.
- (81) 神から受けたヘブライ人の知恵をギリシア人たちが剽窃して己がものとしたという論調は、アレクサンドリアのクレメンヌスなどにも見られる。*Stromateis*, I, xvii, 2, 邦訳, 七〇頁。中世において大きな影響力を持ったアウグスティヌスの『キリスト教の教え』(*De doctrina christiana*)でも、同様の考えが述べていられる。*De doct. christ.*, II, xl, 60, GSEL, 80, 75f. 以下も参照。Bresard and Crouzei, “Les Grecs «voleurs de la philosophie barbare»,” in *Commentaire*, p. 755f.
- (82) M写本では“priora inuenta”となっているが、I写本の“propria inuenta”を採った。
- (83) 校訂では“voluminibus comprehensa posteris, quoque tradenda”となっているが、カンマの位置を変えて“voluminibus comprehensa, posteris quoque tradenda”となっている訳出した。
- (84) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 5, Baehrens, p. 76; SC, p. 132f.
- (85) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 6, Baehrens, p. 76; SC, p. 132f.
- (86) M写本では“ut docuit”となっているが、I写本の“ut decuit”を採った。
- (87) M写本では“succincti...breuibusque sententiis”となっているが、I写本の“succinctis...breuibusque sententiis”を採った。
- (88) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 6, Baehrens, p. 76; SC, p. 132f.
- (89) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 7, Baehrens, p. 76; SC, p. 132f.
- (90) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 17, Baehrens, p. 78; SC, pp. 138-141.
- (91) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 18, Baehrens, p. 78; SC, p. 140f.
- (92) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 19, Baehrens, p. 78f; SC, p. 140f.
- (93) M写本では“scala in caelum porrecta”となっているが、その版の“scalas in caelum porrectas”を採った。
- (94) *Comm. in Cant. cant.*, Prol., iii, 20, Baehrens, p. 79; SC, p. 140f.

(本学大学院博士後期課程)

※訂正

本史料紹介につきまして、左記の訂正がございます。

〈一五九頁下段・一四行目〉

(誤) 希：phyopukh

(正) 希：šialakruči

〈一六〇頁上段・七行目、同下段・一八行目〉

(誤) ミュンヘン州立図書館

(正) 在ミュンヘン、バイエルン州立図書館

以上の誤りを謹んでお詫び申し上げます。

著者